

釜石市栗林町仮設団地における Bridge のボランティア活動

川 澄 厚 志*

はじめに

東日本大震災は、これまでわが国がくり返し経験してきた大震災や巨大災害とは大きく異なる特徴を持っている¹⁾。こうした特徴を有する巨大災害に対し、われわれはどのような復興まちづくりを考えていけばよいのだろうか。佐藤滋(2011)によれば、21世紀初頭の日本の状況と時代背景を整理して、まちづくりの観点から復興を捉えており、地域それぞれの多様な文化を深く認識し、歴史風土と自然生態学的秩序に育まれた地域性を尊重する動きであり、このようなパラダイム転換のなかで、東日本大震災の復旧・復興に取り組むことについて指摘されている。そうした場合、被災した地域を再生し、その活力を取り戻すためには、定住人口だけでなく学生ボランティアを含む外部者とのさまざまな交流活動についても注目すべき点としてあげられよう。また、域学連携を推奨しているような地域では、外部者によって地域資源の再評価も試みられている。

Bridgeでは、岩手県釜石市栗林町を主な支援活動の対象とし、復興を支援するために販路確保を通じた「交流活動」を展開している。Bridgeは、東洋大学東日本大震災復興問題対策チーム²⁾のグループ⑫(以下、グループ⑫)の支援活動の一環として、2013年4月に設立された学生有志によるボランティア団体である³⁾。Bridge設立当初におけるメンバー構成は、東洋大学国際地域学部国際地域学科の学生(3年生2名、2年生7名)が中心となっている。これまでにBridgeでは、被災者や関係者らとの間で持続的な交流を目指し、ハンドクラフト製品の販路確保支援を通じて、被災地の現状に関する聞き取りや座談会を実施した。そこで本稿では、Bridgeにおける支援活動の成果と課題を明らかにし、仮設住宅への入居以降のフェーズにおいて、学生ボランティアの関わり方について考察することを目的としている。

1. 震災における学生ボランティアの動向と被災者の生活支援ニーズ把握の必要性

最近のボランティア活動の傾向について、岡本榮一他(2006)⁴⁾によれば次のように整理している。①福祉から地域、文化、教育、環境、平和など多様化していることに加え、身近な地域での福祉活動から国際的な活動まで幅広さ持つようになってきた「活動の多様化」、②受け手と与え手

* 東洋大学国際地域学部：Faculty of Regional Development Studies, Toyo University

がはっきりしてきたが、当事者と一緒に活動する・楽しむようになってきた「活動の共同化」、③伝統的な奉仕型、地域組織などと密着した動員型の活動に加えて、運動性に富んだ市民活動型も増えつつあるといった「活動の市民化」、④いじめや不登校との関連から、人と人との関係性などが学習できるボランティア活動の体験性が注目され、総合学習との結びつきが強くなっているといった「活動の教育化」である。

2014年10月23日で中越地震から10年が経過した旧山古志村（以下、山古志）では内外の支援者との間でさまざまな交流が生まれている。川澄厚志(2013)⁵⁾では、山古志の「美しいただずまい」や「ゆったりとした生活」を支える外部パワーを「社会的支援」と定義している。中越地震後の山古志には観光客が多く来るようになった。観光客は棚田の写真を撮る、直売所で山菜や野菜を買い求める、被災地観光として訪れる人も多い。一方で、山古志住民たちは、農村体験・農業体験を求める都市の子どもたちや学生たちを熱心に受け入れている。交流や観光も「社会的支援」であり、外部からやってきた学生ボランティアの存在も「社会的支援」である。多様化する被災者の生活支援ニーズについて、山古志では中越地震後、高齢化が進み、集落の機能が低下した現在では、住民からさまざまな生活支援ニーズが要求されている。図1に、対コミュニティ支援か対個人支援を軸に、生活支援ニーズを類型化する。例えば、お祭りなどの伝統行事の援助では、集落が主体となって運営されることが考えられる。しかしながら、高齢社会となった地域では、この運営が難しい状況となっている。こうした状況下において、外部からの支援を取り入れて、交流人口を増やすといった工夫が必要となってくる。持続的に地域を自立させていくといった点からも、さまざまな生活要求に合わせた制度設計が求められる。

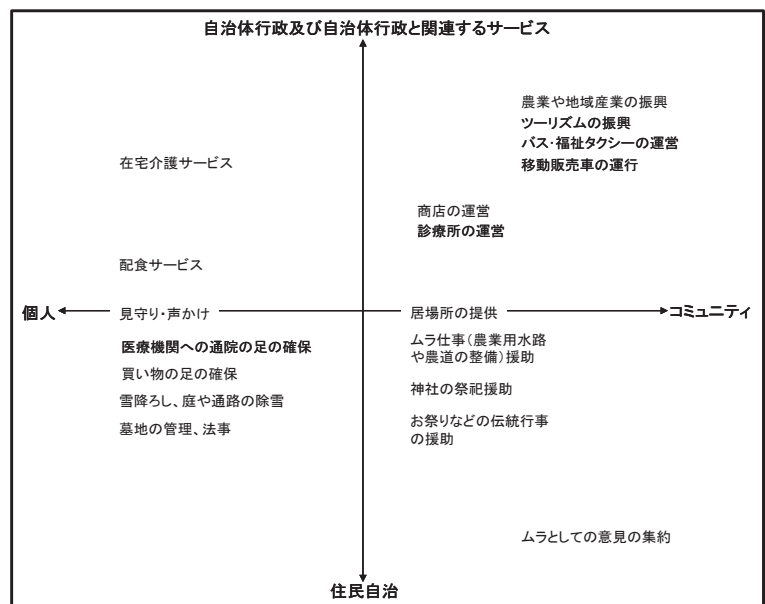


図1 山古志におけるさまざまな生活支援ニーズ
出典：川澄厚志（2013）、p.247

2. Bridge の販路確保支援を通じた社会的支援の展開

2-1 Bridge の支援活動の経緯

被災地でソーシャルビジネスなどを展開している小規模住民グループの活動支援を主な目的としたグループ⑫は、設立当時、東洋大学国際地域学部とライフデザイン学部、立教大学観光学部、奈良県立大学地域創造学部などの若手研究者や山の暮らし再生機構などの若手実務家を中心的なメンバーとして東洋大学復興問題対策チームの中で組織化され、岩手県や宮城県の被災地やその周辺地域において、2011年度から2013年度までに12回の現地視察を行ってきた。とりわけ釜石市にお

いて、現状の把握とニーズ、および支援活動の実行可能性について調査を実施し、具体的に何か支援できることはないか、グループ⑫のメンバー間や同行した学生らとの間で検討してきた。そのような中で、岩手県釜石市鶴住居の根浜海岸にある宝来館の岩崎昭子氏から栗林町仮設住宅団地で活動する女性グループ「レインボー」を紹介された。2013年6月1日から3日にかけて実施した現地視察では、レインボーとの間で販売に向けた具体的な打ち合わせを行った（写真1）。



写真1 レインボーへのヒアリングの様子 (2013年6月)



写真2 五角座布団キーホルダー (2013年6月)

東日本大震災による被災後しばらく、栗林町仮設住宅団地の男性（お父さん）たちは港の瓦礫の片づけや、船や漁具の修理などを行っていた。一方で、女性（お母さん）たちは仮設住宅の敷地内にある集会所に集まり、お茶を飲みながら（お茶っこ飲み）コミュニケーションをしていたが、何か他にもできることがあるのではないかと、被災の記憶の気を紛らわせるためには何かやれることがあるのではないかと考えた。そのような時、埼玉県三郷市の布団業者からレインボーへ座布団の生地や綿などの材料の提供について申し出があった。レインボーの女性たちは各々がハンドクラフト製品をつくるための技能はすでに持っており、復興支援金などからミシンを調達し、仮設住宅の集会所で五角（合格）座布団を作製するようになったのである。後に、五角座布団は、Bridgeのメンバーの提案により小型化され、キーホルダー型のものもラインアップされた（写真2）。また、座布団だけでなく、毛糸を使った「エコたわし（写真3）」の作製も行うようになった。ここでの「エコ」は、食器を洗う際に使用する洗剤が少なくすみ、それにより、濯ぐ際に使用する水の量もまた少なくなることを意味している⁶⁾。グループ⑫におけるこれまでの現地での聞き取り調査の結果から、レインボーのお母さんたちは、こうしたハンドクラフトの作製を通して「普段は人の集まらない仮設住宅団地の集会場に人が集まるようになった」、または「この活動がなければ知り合いもできず仮設住宅の部屋に閉じこもりがちだったかもしれない」など、自らの活動について指摘している。



写真3 エコたわし (2013年6月)



写真4 生協白山店での販売開始 (2013年7月)

一方、Bridge では、次の三つのコンセプトをもとに活動を開始している。第一に、「持続的な交流の構築」である。この販路確保支援で通して築いたレインボーや、さまざまな支援団体（支援者）などとの関係性を一時的なものにしないための仕組みづくりを試みている。第二に、「学び合いによる現地と Bridge との win-win 関係の構築」である。外部者が現地の人たちにできることは、地域の魅力を再確認していくために地域資源の再評価をしていくこともその一つであると考えている。Bridge のメンバーは、住んでいると当たり前になってしまう土地のことを外部者が再発見することによって町おこしにつながるのではないかと考えているようである。第三に、「被災の記憶を風化の防止」である。被災地やその周辺地域、日本全国の地域において、震災から月日が経つにつれて被災したことを風化させていると感じているようである。



写真5 瓦ReKEY HOLDER (2013年6月)



写真6 瓦Re: きっとフォト (2013年6月)

販路確保支援について、Bridge では東洋大生活協同組合白山店（以下、生協白山店）の協力を得て、被災地で作られたハンドクラフト製品の販売している（写真4）。Bridge の取扱商品は、「五角座布団キーホルダーお守り」、「エコたわし」、岩手県陸前高田市での復興事業として職人工房（北海道札幌市）が作製した「瓦 ReKEY HOLDER（写真5）」、「瓦 Re: きっとフォト（写真6）」

である。「五角座布団キーホルダーお守り⁷⁾」には、レインボーのお母さんたちが、「合格」や「成就」の想いを込めており、それら一つ一つが手作りである。

Bridgeの運営戦略については、一株500円の株式ゲームを用いており、販売した株式総数は466株(233,000円)であった。この資本金をもとに、2013年6月にレインボーや職人工房から商品を買取り⁸⁾で仕入れることができた。委託販売ではなく買取りとした理由は、現地の要求を汲み取ることを最優先として決定した。Bridgeでは、ハンドクラフト製品の販売を通して被災地との関係性を構築し、被災地と外部との間で交流人口を増やすことを目標としている。また、この株式ゲームの仕組みによって活動予算が確保されたことに加え、株を購入してくれた人もBridgeの一員として交流活動に参加する仕組みとなっている。

2-2 Bridgeメンバーの参加動機

Bridgeの設立時点(2013年4月)における参加学生の「Bridgeの支援活動への参加動機」については以下の通りである。

Aさん(3年生、女性)、「私たちの活動を通してもっと釜石市の良いところ知ってほしい。被災者の心の支えになりたい。架け橋になれるように必死に頑張りたいです。」

Bさん(3年生、女性)「最近テレビなどでも被災地の現状を見る機会がとても減ってきています。しかし現在もなお、自ら行動を起こしいち早く復興しようと頑張っている方が多くいます。私達が対象にしているのはその一部ですが、私達を通して現地の方々の活動を少しでも知ってもらえたらと思います。」

Cさん(2年生、女性)「私は仙台出身です。震災直後の被災地や被災者の様子を目の前で体験しました。いろいろな気持ちがあるけど、何よりも大好きな東北に当たり前の毎日が戻るように自分ができることをしたいという気持ちでこの活動に参加しています。」

Dさん(2年生、女性)「震災から2年経った今、沢山の想いを抱えながらも前を向いて歩いている人がいる。そのことを沢山のの人に知ってもらい生産者と消費者のあったかい輪を作れば素敵だと思います。」

Eさん(2年生、女性)「震災から2年たった今でも東北はまだ復興途中です。(中略)少しでも多くの人に東北の現状を伝え、災害があったという現状を忘れて欲しくないと思います。そのためにも現地の人々と私たちの活動に興味を持って下さった方の架け橋になりたいと思います。」

Fさん(2年生、女性)「震災が起こってから2年。テレビなどでもあまり被災地のことは報道されなくなってきてしまったけど、東日本大震災は絶対に忘れてはいけないと思うから学生にできること、学生だからこそ、ヨソモノだからこそアイデアをもって向き合いたいと思います。」

Gさん(2年生、女性)「東日本大震災が発生してから2年経ちました。みんなの頭の中からは少しずつあの時の中からは少しずつあの時の記憶が薄れつつあるように思います。しかし実際に現地に行くと何もない土地が広がり、家や建物があったはずのところには土台のコンクリートしかなく、草が生えているという状況です。(中略)私はこの団体の一員として地元の人と交流していき、後世につなげていきたいと思っています。一時的なものではなく、今後、20年、30年と続いていくようにしたいです。一人の力では何にも出来ないことでも、みんなが集まれば多くのことをすることができます。たくさんの人と触れ合うことで、何か生まれます。そこから新たな考えも生まれま

す。私は人と人のつながりはもっとも大切なことだと思います。』

Hさん（2年生、女性）「東日本大震災から2年が過ぎ、メディア等でも被災地の現状を知る機会が少なくなってきたように思います。あの大惨事から私たちが学んだこととは一体何だったのか、風化しつつある現状を誰かが止めなければいけない。（中略）私たちが出来ることは発信し続けることだと思っています。その為には、被害に遭われた方々との深い交流から生まれる信頼感が大切だと思うのです。出来るだけ多く被災地に足を運びそこから感じたこと、学んだことを、伝え続け一緒に成長していきたいと思っています。』

上記のように各メンバーの Bridge への参加動機は明確であり、これまでの販路確保支援を通して、被災者、学生、教職員、大学生協、民間企業、NPO や個人事業者などの支援団体との交流を図ってきた。グループ⑫では、こうした明確な問題意識を持った Bridge に対して、主に現地の生活要求ニーズを把握するための情報を提供してきた。都市と農村間の交流の形はさまざまであるが、「まず自分たちにできることからはじめよう！」をモットーに、被災地への社会的支援を展開すべく学生は主体性をもって活動している。これはボランティア活動の傾向の中で、岡本榮一らが整理している活動の教育化との関連で、学生は多様化している地域社会を捉え、その「解決力」や「創造性」を身につけていく可能性がある。

2-3 活動成果

① 販路確保活動の記録

2013年7月4日、生協白山店に協力を得て、レインボー製作のハンドクラフト製品の販売を開始した。Bridgeにはこの販売活動における主要な役割を担ってもらった。学生たちは、自身のアルバイトの経験なども活かし、売り場のレイアウトや商品陳列にも工夫を凝らしながら販売活動に取り組んでいた。さらに、Bridgeのメンバーを同行させたグループ⑫の現地視察を通じて、北海学園大学や筑波大学の学生らとの交流も生まれた。これまでの販路確保支援活動は表1の通りである。活動開始より1年間の記録ではあるが、これまでに Bridge では、株主（教員4人、主婦2人、学生28人が購入）、生協白山店（店舗および、オープンキャンパス、写真7）、北海学園大学、他の学生ボランティア団体（館林フェアトレード、写真8）、NPO法人（アイボリースペース等）、株式会社酒類総研、埼玉県三郷市個人事業者、東洋大学白山会及び学生や教職員など、Bridgeの活動に対して興味を持ち、支援してくれた多くの方との間で関係性を構築してきている。こうした販売活動全体を通して、学生の潜在能力の高さや秘めたる可能性を再認識するに至った。また、Bridgeの販路確保支援の活動により、レインボーとのコミュニケーションもより円滑に進むようになった。学生の支援活動に対する真摯な姿勢が、そのまま通じたのか、学生たちをグループ⑫の現地視察に同行させて初めてレインボーのお母さんたちを訪問したときから、まるでご自身のお子さんに接するかのよう学生を受け入れてくれた。そして、学生に対し、熱心に自分たちが作製したハンドクラフト製品のことを教えていた。学生たちもそれに積極的に耳を傾け質問をしていた。こうして Bridge の現地のニーズに応えるといった「交流」が、具現化していったのである。

Bridge が取り扱う商品を購入してくれたお客さんに対して、生協白山店に被災者へのメッセージボードを設置した。そのボードには、①被災地との交流が出来てうれしく思う（10代女性）、②これからも元気いっぱい頑張ってください。応援しています（7歳女性）、③エコたわしがとて

も使いやすい。これからも貢献したい(20代女性)、④このような機会に出会えてうれしい。いつも応援しています(40代女性)、などの回答があった。平成25年度のBridgeの収支報告について、2014年5月に開催された平成25年度支援活動成果報告会(総会)によれば、資本金(A)は233,000円に対し、支出(B)が215,450円、売上が138,425円、残高(A-B)が17,550円であり、77,025円の赤字であった。(一株当たり約335円)。Bridgeメンバーのこれまでの活動の振り返りとして、①人との繋がりが生まれた、②ビジネスマナーを学んだ、③改めて東北の復興について考えるきっかけになったなど、については評価している。その一方で、①思った以上に商品が売れない(商品開発の必要性)、②人々の東日本大震災への関心の薄れを感じた、③レインボーのお母さんたちとの交流が十分ではなく商品を販売する際に生産者の想いを伝えられないなど、については課題として指摘されている。

表1 Bridgeにおける販路確保支援活動の記録

月日	場所	内容
2013年6月1日-3日	釜石市栗林仮設住宅団地	現地調査、商品購入
6月12日	東洋大学白山キャンパス	総会(事業計画発表)
7月4日	東洋大学生協白山店(2014年10月まで)	生協白山店での販売開始
7月14日-15日	東洋大学白山キャンパス	オープンキャンパスでの販売
8月6日	北海学園大学豊平キャンパス	オープンキャンパスでの販売
8月20日-25日	群馬県、アピタ館林店	館林フェアトレードでの販売
8月23日-24日	東洋大学白山キャンパス	オープンキャンパスでの販売
9月1日	東洋大学板倉キャンパス、館林市	石巻映画上映会、商工祭での販売
9月14日	東洋大学白山キャンパス	オープンキャンパスでの販売
9月29日	北海学園大学豊平キャンパス	オープンキャンパスでの販売
10月6日	株式会社酒類総研	会社イベントでの販売
10月12日-14日	釜石市栗林仮設住宅団地	座談会での販売報告、ワークショップ
10月27日	東洋大学白山キャンパス	白山会での販売
11月16日-17日	埼玉県三郷市	商工祭での販売
12月12日	東洋大学白山キャンパス	国際地域学部教職員への販売
2014年5月21日	東洋大学白山キャンパス	総会(H25年度活動・収支報告)

注：上記の活動に加え、週一度程度の定期的なBridgeメンバーの会合が開催されている



写真7 オープンキャンパスでの販売（2013年7月）



写真8 館林フェアトレードでの販売（2013年8月）

② 座談会の開催

2013年10月13日、栗林町仮設住宅団地において「防災と復興：住民主体の復興まちづくりの展望」をテーマに座談会を開催した。参加者は、レインボーのメンバー、一般社団法人三陸ひとつなぎ自然学校のスタッフ、栗林町仮設住宅団地の住民、宝来館女将、東洋大学関係者、北海学園大学生などが参加した。既述の通り、Bridgeの活動目的は、被災地で製作されたハンドクラフト製品の販売を行うことそのものではなく、あくまでその先にある、被災地または被災された方と大学との「交流」、およびそれを媒介として長期的な関係性の構築を想定しつつ復興問題を一緒に考えていくということである。「売りっぱなし」では、到底「交流」したことにはならないし、この現地へのフィードバックこそが、この交流活動の肝である。

当日は、Bridge代表のAさんから生協や各種イベントなどにおける販売の状況などについての報告があったほか、10年を迎えようとしているスマトラ沖地震による津波被害からの復興過程についてタイの事例を筆者から紹介した。その後、ワークショップ形式で「これまでの交流の振り返り」、「今後の交流の進め方」、「これまでの仮設住宅での生活の状況」など、参加者間で活発に意見が交換された。このワークショップで明らかになった点は図2の通りである。まず、Bridgeメンバーが考えるレインボーとの交流において良かった点の指摘について、①達成感、②自信、③問題意識の醸成、④その他に分類することができる。「①達成感」では、「釜石に来ることができた」、「レインボーの方々と座談会ができた」などの回答であった。「②自信」では、「商品が売れた（御守りが売れた）」などの回答であった。「③問題意識の醸成」では、「販売することで交流とは何か考えることができた」の回答であった。「④その他」では、「Bridgeに10名が集まった」、「販売活動を通して色々な人に出会えた（他3名）」などの回答であった。次に、販路確保支援において大変だった点の指摘について、①販売、②交流、③専門性、④その他に分類することができる。「①販売」では、「思ったよりも商品が売れない（他1名）」、「学内での販売が大変だった」などの回答であった。「②交流」では、「もっと釜石へ来たかった（他1名）」、「消費者と生産者をつなぐ情報交換が不確実」、「現地のお母さん方はお忙しそうで連絡を取るのがいいものなのか考えてしまい、連絡があまり取れなかった（他1名）」、などの回答であった。「③専門性」では、「住民と外部者とのWin-Winな関係を構築していくうえでのニーズの把握の仕方がわからない」の回答であった。「④その

他」では、「メンバーの問題意識を維持させていくことが難しい」の回答であった。一方で、レインボーメンバーが考える Bridge との交流において良かった点の指摘について、「ヨソの方々との交流が生まれた（特に若者）」、「Bridge の活動で元気をもらった」、「クラフトづくりが楽しかった（他1名）」、「仮設の部屋が少し明るくなった（他1名）」、「家庭科の授業よりも勉強になる（花嫁修業になる）」などの回答であった。また、今後の交流に向けたアイデアの指摘について、「商品づくりの過程を共有することでアイデアが生まれる」、「いかに商品にストーリーを乗せられるか。作り手を知ってもらう。」、「意識、目的、成果の共有」などの回答であった。

Bridgeメンバー 支援活動して良かった点	レインボーメンバー 支援活動して良かった点
<p>【達成感】</p> <ul style="list-style-type: none"> 釜石に来ることができた レインボーとの方々と座談会ができた 販売をしているとお客さんに、「応援している」や「頑張ってるね」など、声を掛けていただいた。 活動を通して、視野が広がった <p>【その他】</p> <ul style="list-style-type: none"> Bridgeに10名が集まった 販売活動を通して色々な人に出会えた(他3名) みんなと復興に関わられた 	<ul style="list-style-type: none"> ヨソの方々との交流が生まれた(特に若者) レインボーの活動で元気をもらった クラフトづくりが楽しかった(他1名) 花をもらってうれしかった(仮設部屋が少し明るくなった)(他1名) 家庭科の授業よりも勉強になる。花嫁修業になる
	<p>今後の交流に向けたアイデア</p> <ul style="list-style-type: none"> 商品づくりの過程の共有をすることでアイデアが生まれるだろう いかに商品にストーリーを乗せられるか。作り手を知る。学生さんが発信 一緒に作ることを通じて交流する 専門家からの助言。デザイン、マーケティング 意識の共有。目的、成果など
<p>支援活動して大変だった点</p> <p>【販売】</p> <ul style="list-style-type: none"> 思ったよりも商品が売れない(他1名) 学内での販売が大変でした。どのようにしたら学生の心をつかめるのか。 <p>【交流】</p> <ul style="list-style-type: none"> もっと釜石へ来たかった(他1名) 消費者と生産者を「つなぐ」情報交換が不確実 現地のお母さん方はお忙しいので連絡を取るのが難しいものなを考えてしまい、連絡があまり取れなかった(他1名) 今後、Bridgeとレインボーとの関係をもっと深くしていきたい 多くの学生(学校)に活動を知ってもらえなかった 男子学生が集まらない <p>【専門性】</p> <ul style="list-style-type: none"> 住民と外部者とのWin-Winな関係を構築していくうえでのニーズの把握の仕方 <p>【その他】</p> <ul style="list-style-type: none"> メンバーの問題意識を維持させていくことが難しい 	<p>仮設住宅での生活</p> <ul style="list-style-type: none"> 子供の居場所がない 周りに誰が住んでいるのかわからない 寒い 音が気になる(隣家の生活音が気になる) 仮設の部屋が狭い(4.5畳に一人暮らし+台所・風呂) 盆、正月の時に家族がそろった時に居場所がない 色々な人が来るから意外と忙しい 人が多く来すぎた(ありがたの言い疲れ) 調査疲れ(ヒアリング、アンケートなど) 移転先の目途が立たない 情報が一方的で生活の見通しがたかない 将来どうなるのか、どこへ行ったらよいのか途方に暮れた 80戸で3~4戸が移転した 「何かしたいんだけど…」「何か欲しいものがあるか」等漠然とした問いが多い 隣の音が気になり、困っている 物音(風呂の扉の開け閉め)

図2 KJ法によるワークショップの結果

ハンドクラフト製品の販路確保支援が、このような座談会の開催に結びついたことは、Bridgeのこれまでの成果といえよう。地元の方との意見交換などを通して、Bridgeのメンバーらは、被災者のこれまでの苦労に触れるとともに、被災地が置かれている現状や課題を理解することは、震災から時間経過していくにつれて、復興問題を共に考えていくという姿勢は特に重要となる。また、今後の「持続的な交流」の構築については、Bridgeメンバーの振り返りにおける課題でも指摘されていたように、現地へ実際に出かけていく機会の創出が不可欠である。

3. まとめ

日本全国の地方・地域全体の課題となっている少子化・高齢化問題が釜石市でも震災の前から人口の減少や地域産業（製鉄）の衰退などに直面している。こうした問題はこの震災をきっかけに、より深刻化し加速化しているが、インフラ整備を中心とした復興となるとこうした地方・地域が抱える共通の問題について見過すことになりかねないことが予測できる。東北の被災地に限らず、日

本全国の地方・地域全体の再生をどのように考えていくのか、このことは日本社会にとって、もっとも重要かつ解決が困難な課題の一つであろう。

Bridge とレインボーとの「交流」を通じて、釜石市栗林仮設住宅団地において被災者の生活支援ニーズが多様化していることが明らかになった。Bridge の活動では、日々変化している現地のニーズの把握を試みて、その地域再生や復興について学生たちのできる範囲で活動をしてきた。その意味で、この活動の大きな成果であり、それは道半ばであり、今後も活動を続ける必要があるだろう。

一方で、その活動のあり方については、常に点検が必要となる。意図せずともこうした活動が現地に対して押しつけやおせっかいになっている場合もあるからである。座談会の中で、特に印象的だった栗林町仮設住宅団地での生活状況の中に、「訪問者に対する対応疲れ」「ありがたいの言い疲れ」というものがあった。この点を十分に認識しておかなければならないが、Bridge の活動を振り返る中で、現地との連絡体制、商品開発における製造過程の共有、現地の希望や意思を汲み取った活動内容、などその反省点や課題も確認できる。具体的には、①あるメンバーは、商品を販売することがメインになり、赤字となった一年目の活動で販路確保支援に疑問を持ってしまった、②ボランティア活動に興味を持つような積極的な学生は、他の活動にも参加しており、その時々優先順位や時間的な制約から現地に行くことができるメンバーが限られてしまった、③メンバー間での情報の共有が徹底されていなかった、などの点である。このように、Bridge の活動でみえてきた学生ボランティアの課題は山積している。しかしながら、あるメンバーはこの Bridge での活動がきっかけとなり、卒論のテーマとして釜石市栗林町を研究対象地域として選定している。こうした個人的なつながりは、組織的な活動としては停滞期になったとしても、これまでに築かれた関係性は現地との間で継続していくだろう。

Bridge における活動の成果と課題からみえてきた学生ボランティアの今後の展望について、①外部者でも受け入れてくれる現地拠点を確保する、②活動予算を確保する、③大学生として責任ある行動をとる、④問題意識の設定を明確にする（学生にとってグループ⑫のような支援は必要である）、⑤目に見える成果を現地に求めすぎず、地道な活動として得られた成果や情報を関係者間で共有するなど、今後の課題を克服し、被災地で学生ボランティア活動をしていく上で、復興支援活動に関わる各アクターとの間で継続的に「交流」をしていくことが求められよう。

【追記】

本稿は、東洋大学東日本大震災復興問題対策チーム及び、東洋大学井上円了記念研究助成による研究成果の一部をまとめたものである。

現地での活動は関係諸氏の協力により実現した。ここに記して感謝申し上げたい。

【注釈】

- 1) 佐藤滋編 (2011)
- 2) 東洋大学東日本大震災復興問題対策チーム（代表：藤井敏信）は、被災地復興を支援するために、2011年10月に正式に発足した。初年度には12の専門的なグループを形成しており、生活再建支援、仮設住宅地の運営

支援、地域産業の起業支援、地域情報に関する支援、学生ボランティアの派遣活動の支援、学術団体としての知識共有・支援活動などを行ってきた。本チームは2014年3月に解散している。

- 3) 筆者はグループ⑫の代表であり、Bridgeの顧問である。
- 4) 岡本榮一、菅井直也、妻鹿ふみ子編(2006)
- 5) 川澄厚志(2013)
- 6) 宮島良明(2014)
- 7) 各種試験合格、就職成就、恋愛成就などである。それ以外にも多数の種類がある。
- 8) この商品購入(2013年6月～7月)は、五角座布団キーホルダーお守りは200個、エコたわしは163個、瓦ReKEY HOLDERは40個、瓦Reきつとフォトは10個であった。

[引用文献]

- 岡本榮一、菅井直也、妻鹿ふみ子編(2006)『学生のためのボランティア論』、社会福祉法人、大阪ボランティア協会
- 川澄厚志(2013)「社会的支援の展望」、東洋大学福祉社会開発研究センター編『山あいの小さなむらの未来-山古志を生きる人々-』、博進堂
- 佐藤滋編(2011)『東日本大震災からの復興まちづくり』、大月書店
- 宮島良明(2014)「3年間の支援活動を総括するための東北出張を終えて」、東洋大学東日本大震災復興問題対策チーム2013年度活動成果報告書

Challenge of Bridge's Volunteer Activities in Kuribayashi Temporary Housing Estate, Kamaishi

Atsushi KAWASUMI

The disaster of Great East Japan Earthquake has very different characteristics from earthquakes and huge disasters occurred in Japan in the past. Since 1 April 2013, the Bridge has been supporting Rainbow's handcraft group (Kamaishi, Iwate prefecture) with expanding its marketing in Kanto area. The members of Bridge are students of Faculty of Regional Development Studies, Toyo University, and Bridge has collaborated with the Great East Japan Earthquake reconstruction team of Toyo University. The purpose of Bridge activities is to build sustainable exchanges between the affected people and the stakeholders concerned disaster reconstruction.

The purposes of paper are as follows.

- a) To explain the result and challenge of Bridge's support activities for Rainbow's handcraft group in Kuribayashi Temporary Housing Estate.
- b) To observe volunteer students' collaboration with people who are active in the reconstruction process.

In conclusion, there are five points that I have noticed through the students' activities.

- 1) To obtain the local base that allows such volunteer students
- 2) To raise enough budgets for volunteer activities
- 3) Volunteer students should be aware of responsibility
- 4) Volunteer students should be aware of issues in such affected communities
- 5) To share results and information obtained among stakeholders.

By establishing sustainable and communicable relationship between local people and volunteer students from outside, I believe it is not impossible to reconstruct those affected communities.

Keywords: Machizukuri from Disaster, Volunteer Student, Community, Small Group, Kamaishi